Symposium | Surgery

Fri. Nov 20, 2026 8:30 AM - 10:00 AM JST | Thu. Nov 19, 2026 11:30 PM - 1:00 AM UTC | Room 1 (2F Convention Hall 1)

Symposium 1 Clinicopathological Features of Early-Onset Colorectal Cancer 1

司会：船橋 公彦（横浜総合病院消化器センター外科）、山田 岳史（日本医科大学消化器外科）

[SY1-2] Clinicopathological Characteristics and Prognostic Evaluation of Early-Onset Colorectal Cancer: A Comparative Study Specifically Focusing on Sporadic pMMR/MSS Tumors

*Tomoyuki Momma[1] (1. Depertment of Gastrointestinal Tract Surgery, Fukushima Medical University School of Medicine)

【背景】若年発症大腸癌（EOCRC）は世界的に増加傾向にあるが、その予後については不良とする報告から同等あるいは良好とする報告までさまざまであり、一定の見解が得られていない。この背景には、遺伝性腫瘍、炎症性腸疾患関連癌、dMMR/MSI-H腫瘍など、生物学的に異なる集団の混在が影響している可能性がある。
【目的】EOCRCの純粋な生物学的特性を明らかにするため、これらの交絡因子を除外したsporadic pMMR/MSS大腸癌に限定し、EOCRCの臨床病理学的特徴と予後を明らかにすることを目的とした。
【対象・方法】2004年から2025年までに当院で原発巣切除を施行した大腸癌1,600例を後方視的に検討した。遺伝性腫瘍、炎症性腸疾患関連癌、dMMR/MSI-H症例およびMMR/MSI不明例を除外し、1,218例のsporadic pMMR/MSS症例を解析対象とした。50歳未満をEOCRC（n=86）、50歳以上をLOCRC（n=1,132）とし、臨床病理学的因子を比較するとともに、癌特異的生存（CSS）および再発までの期間（TTR）を評価した。
【結果】臨床病理学的特徴において、EOCRC群はLOCRC群に比し、女性の割合が有意に高く（50.0% vs 36.0%, P=0.012）、また進行例が多くStage III・IVの割合が高かった（P<0.001）。一方、腫瘍局在および組織型に有意差は認めなかった。CSSは単変量解析ではEOCRCで不良であったが（P=0.042）、Stage別解析ではいずれのStageにおいても有意差は認められず、多変量解析においても年齢は独立した予後因子ではなかった（HR 0.84, P=0.512）。また、Stage I–IIIの根治切除例におけるTTRも両群で差を認めず（P=0.510）、多変量解析ではEOCRCは再発リスク低下傾向を示した（HR 0.52, P=0.084）。
【結論】sporadic pMMR/MSS大腸癌において、EOCRCは女性比率や進行期で発見される割合が高いものの、Stage調整後の予後および再発リスクはLOCRCと同等であり、年齢そのものは独立した予後因子ではなかった。EOCRCの予後不良は、年齢自体の生物学的悪性度よりも、診断時進行度の影響が強い可能性が示唆され、早期発見のためのスクリーニング体制の構築が重要であると考えられた。

©一般社団法人 日本大腸肛門病学会